

## 巻頭言

# 幸せな人を育てる

山口 茂嘉

子どもの幸せを願わない親はいない。しかし、一体何が幸せなのか分からなくなってきたというように思う。有名大学を出て世間体の良い仕事に就き、高収入を得ることが幸せの条件かといえば、決してそれだけではないようである。なぜなら、これらの条件が全部そろって経済的にどんなに豊

かでも、不幸な人たちの居ることを、われわれは知っているからである。経済的な豊かさは、幸せの必要条件であるかもしれないが、決して十分条件ではないらしい。しかし、何が幸せの条件であるかを見失った現代の親たちは、「高学歴≡高収入≡幸せ」の幻想に取りつかれて、幼児期から子

どもたちを、受験競争に駆り立てているようである。このような現代社会の問題点を鋭くえぐり出した小説の一つが、城山三郎の『素直な戦士たち』（新潮社）である。

では、一体、幸せとは何なのだろうか。子どもたちが幸せな一生を過ごすために、親として、どのようなことに気をつけて育てれば良いのだろうか。そのことを考える一つの手掛かりとして、長年にわたり不幸な人々の治療にたずさわった精神科医A・アドラーの考えを参考にしたいと思う。

彼は、幸せの条件として、次の三つを挙げている。幸せの一番目の条件は、自分の欠点も含めて、自分自身を受け入れることができること（自己受容）である。もう少し分かりやすく言えば、自分で自分が好きであるということである。確かに、私たちは、欠点の多い存在である。しかし、それにとらわれ過ぎて自分が嫌いだったら、それ

は、とても不幸なことなのである。それ故、欠点も全部ひっくるめて自分を受け入れることができるようになることが大切である。そのためには、子ども時代に親や周りの大人から十分に受容されたい体験を持つことが必要である。

幸せの二番目の条件は、他の人、周りの人たちに信頼できること（他者信頼）である。私たちは、周りの人たちの信頼によって心理的に支えられているのであり、その信頼が失われれば、失われる程、孤独になり、不幸になるのである。そして、私たちが、人生で最初に出会う人間関係は、家族である。それ故、家族の中で無条件に信



頼され、信頼したという体験が、他者信頼の原点である。

幸せの三番目の条件は、他の人のために役に立っている知識や技術を持ち、役に立っていると感ずること（貢献感）である。家族というのは、社会の一番小さな単位であり、父親には父親の、母親には母親の、子どもたちには子どもたちの役割があり、お互いにそれを果たし合うことによって成り立っている共同体なのである。そして、子どもたちは、家庭での手伝いを通して、人の役に立てる喜び（貢献感）を身につけていくのである。

かつて総理府が、国際児童年の事業として、アメリカ、イギリス、フランス、タイ、韓国および日本の六か国における十〜十五歳の子どもと、その母親を対象に、生活実態と意識について調査したことがある。その結果をみると、この六か国の中で、一番手伝いの時間が短かったのが日本の子

どもであった。そして、「他の人に感謝されたことがある」と答えた割合も低かった。その逆に、

学校の授業が終わってから勉強している（させられている）時間は、一番長かった。このような結果から、勉強の意義は認めても、子どもの成長における手伝いの意義を正しく認識していない親が増加しているようである。確かに、最近のわが国では、社会構造の急激な変化、家庭生活の省力化によって、家庭で子どもにさせる手伝いが減少してきたことも事実である。さらにもっと悪いことには、「勉強さえしていれば、何もしくなくて良い」という風潮が世の中に広がってしまったことである。その結果、親や周りの人から、いろんなことをしてもらうのが当たり前で、自分が相手のために役に立った喜び（貢献感）を体験しないまま成長する子どもが増えてきているのである。このようにして育った「してもらって当たり前人間」

は、してもらって当たり前、してもらえなければ、不平・不満ばかりの利己的な人間になるのである。これでは、子ども本人だけでなく、親や周りにいる人にとっても不幸なことである。

われわれが、勉強するのは、より多くの知識や技術を身につけて、より多くの人たちのために役に立つ（貢献できる）ようになるためなのである。相手のために役に立てる喜び、すなわち、「働くこと」の根本的な意義が見失われて、ただ「学ぶこと」のみが根無し草のように肥大化してしまつたところに、現代のわが国の教育の最大の問題があると考えられる。

幼児期は、「まねる」ことよって、いろんなことを学んでいくとても大切な時期である。この時期からであれば、手伝いを好きにさせるのも無理ではない。そのためにも「頼み上手、まかせ上手」な親になることである。子どもに手伝いを頼

むのは、子どもを信頼してその能力を認めることであり、その成果を具体的に認め貢献感の育成を心がけることなのである。そして、このような家庭教育の基礎があつて初めて学校教育が意味を持つのである。

幸せとは、「仕合せ」とも書き、お互いに仕合せ（貢献し合う）喜びに支えられたものである。すなわち、幸せな人とは、相手のために役に立てる喜びを知っている人のことである。仕事とは、「仕える事」であり、自分の仕事を通じて、相手に仕えることである。それ故、仕える喜び、役に立てる喜びを知る人のみが、人生の真の幸せを味わうことができるのである。そのためにも幼児期からの貢献感の育成はわが国の重要課題である。

（岡山大学）